

北藩鑑卷之二百九十三目錄

う部十六

上杉弾正大弼藤原輝虎

北藩鑑卷之二百九十三

上杉彈正大弼藤原輝虎

一 永祿七年信州口押入野尻城主宇佐貞  
後にも定行上田城主長尾越前守政景  
生害よつき謙信は是見分り信州へ出  
馬らりこしむ依て信玄も子連出陣  
よて十日對陣あり足輕せり合はる

あて別條かきしきし信玄公由一門元家  
老元相後あて信玄公へ誅言中よ  
川中洛四郡を年々由河々とし今年  
まて十二年のる大合戦小せり合毎  
年相止中よまて就虎の勢よて勝負  
由座ふく小海津城附順をうけ方  
へ由元かされ川中洛四郡は謙信へ由  
され由境をお定り来たたりひに元

をく信玄公よ由後河上関東口東洛口  
へ出馬成されよ廣く地をへく存せり  
小わつり河川中洛子由隙由より別た  
謙信と由元合をうて年月を由送  
外の國へは思ふかされりゆりかへ  
よ念むに今年まて謙信よ由隙入小  
ほくまて外の國へ解脱由子よ入中へ  
まよよりより信玄由將心かされ

とあるは存家もむす極せう我等もその  
通り心持謙信とのいふこと相止(きま)  
とあるいふことも先年和睦破れ以後  
たういしに和睦もきまわらぬ我等方  
より和を乞ふことい中(ちゆう)に以て和を乞  
謙信もきま(きま)和睦もきまわらぬと見え  
依て止事(とどめ)とゆふ合戦(くわせん)も及ぶ所(ところ)は  
とあるは又見(またみ)尤(なほ)千万(せんまん)るる(る)さうなる

今年(ことし)もまた十二年(じふにねん)のいふ隙(ひま)と  
る川(かわ)中(ちゆう)務(む)をらのいふもさう  
捨謙信(すけけんしん)も渡(わた)る(る)まやうもさう互(たが)に  
運(うん)のたう(たう)安(やす)向(む)度(ど)六(む)をゆ(ゆ)組(ぐみ)討(う)つ  
勝負(しょうぶ)次第(しだい)川(かわ)中(ちゆう)務(む)をらのいふ(いふ)たう(たう)も  
願(ねが)ふ(ふ)ことありとゆふ(ゆふ)れ内(うち)夜(よ)馬(ま)場(ば)  
甘利(かんり)等(ら)にゆ(ゆ)承(うけたま)わ(わ)る(る)思(おも)は(は)る(る)ゆ(ゆ)は  
小(こ)島(しま)もゆ(ゆ)り謙(けん)信(しん)へ思(おも)は(は)る(る)通(と)す作(しやく)を(を)

され支陣の向より組より勝負由讒  
かさるへくとも右の趣使者と以て  
謙信へ申すなり謙信はしるして家  
光より申され共信玄より上のおもひ  
さしりて若輩あるややうやわつう  
四郡より先きに九ヶ所を西向き  
組よりの勝負次第といふ勝負のやう  
にて他國の聞えも知らずなり忠と信

批判をくくともかく公裁の勝負に任  
まされし中されけるを忠に大和丹後  
下野竹俣ふに一等申けるは信玄の  
臣の通すよかさるへく大和丹後等  
大力の者一人下野の席等よ子業の  
者人並より勝れしもの一人由庵より  
由前へ出され由同くね次第一人由出  
し組より勝負次第川中橋を由隙

暇し北國獲くも由法國かたれ  
八州を由切走らる上方へ由攻のほり  
天下より廣り去らるく存れわらうの  
川中流より隙入るれば免角信玄不  
由り由任せさるるくくりより再之禮  
言中より信信懐く納均よて信玄へ  
の返答より由事より任せ席等一人つ  
支陣の乃へさる出組より勝負

次第より川中流順地境目おき以後  
違乱に在るへくも明日午刻由家  
来一人より出されけ方より一人より  
出さるへく外の者一人も由如く有ま  
く由二人此勝負はお極めよりへく  
事より由りかひのこく返答中をりよ  
れりより信信友人の席等より出され  
友人をりくくし極りより下野



う席等長谷川與五九女つ志ううく  
右明日出組うち勝負もくく信玄  
方まてい定て大力の者これわるも付  
そ仕を頼る組歩勝負もくく見  
そりさもたも共ふ九女つうお業もて  
勝へくとおふとも共ふ九女つう相極  
ける十日の朝謙信共ふ九女つうと出  
され今日此勝負の後代まて名譽を

残もるう能くせよやとて歩要尉斗  
絶死りうて退く共ふ九女つうはとあく  
年の刻りうと共ふ九女つう勇て死  
出馬も系馬上もて名譽ける謙信の  
家老亦及下野も朝信う席等長谷  
川與五九女つ元連とてそのもて小  
由後を通り小兵もてりとも承りう  
及ひ小安向及も見系はるへく今日

とれなる組も勝負まで中飛しハ加勢  
助吉刀たしひよあるましく小若加勢  
助吉刀止ハ木代まき弓矢そ飛辱  
小若へ〜と人奪ま中ける安向彦六  
馬よのり池出何の言葉今釋もあ  
人の男馬と系ちうて共六共五つと  
るよとむつと組友馬の向も落るら  
安向ハ大カといひ大男共六共五つハ

小男され何のともあ〜共六共五つと  
死て伏せる如何〜共六共五つと  
のトよりゆけて安向を後より作向に  
引倒してそまき一刀指て首をとる  
よりあ〜と揚てこれ由流おされし  
長谷川共五共五つ元連と中その組  
討の勝負より安向及の首取てしと  
名系けしこハ上杉勢同なまはし〜



長谷川元らりや其ふたあつゝ感  
中ルハ田州勢きて腹をくらひ七八百  
騎を戸をひきき切て出んとしりき  
けりや馬場氏初内及修理等をも出  
せり安け。信玄中されけり鬼神の  
こゝろある安向うたの小男は住みけり  
幸味方の運あまきとん由卒忽々  
合戦もくわて越後をより殊更約

改違てけ方より切るナルてハ永き馬  
矢の名折たり一人も出まへり  
とそとと安兼て定り通る組討勝負  
次第とナルハ川中修也初ハ謙信ハ  
相渡中リ今日より謙信内心次第か  
さるへくとしてたぐひよ家来二十騎つ  
出〜境目をえて信玄謙信ともに  
馬を入るこれよりして信玄謙信の

ら築坂会相止ヤリトサテ又謙信長谷  
川共ハ出サレ今コ口コ柄  
子業ノ獲ウいハ五  
治リ千貫ノ折紙ヲ出シ並ニ  
中ナ付ル舟ノ下野ノ信國ノ也  
刀錫ヲ川ノ中ニ船ヲ村上ノ義清  
高梨政頼ノ喬ノ願ヲあハ人ノ  
返シ錫ヲ

寛文九年六月上杉家へ右川中  
橋公殿の次弟と酒井雅樂殿  
忠清奉りまゝ上杉家へ御尋  
かされりつゝ上杉家記録又々  
け席マ存命ノ者ハ由テ  
由テその者ト集ル祀ノ由テ  
公ノ穿テ鑿シ吟味は結ス虚言由テ  
小ヤ書付上リ右ハ今ノ度

日本通鑑抄撰作付ししゆまつき  
由縁成されし上杉家人より書出

せしう載せ  
河中浩五藏記 北越家書  
謙信記

一 永祿七年の夏六月大樹茂輝公  
の使節伴勢左京亮小越春四郎は  
来て書を謙信より之の旨を  
述べていし輝虎氏康晴信等関東  
所々より干戈を動し元氏大に苦む

のうし敵軍は遠く天朝をうけい  
給ひ去まりに勅詔しりてをやくを  
収りて國の平ららるるを祇せし  
し敵軍は皆大樹の命なりといふ  
謙信謀て答ていし輝虎を誅す  
まの旨甚く恐怖せるといふなり此  
まもに輝虎私に命を起し好んで  
我をさるるより先年上聞に達する

こゝろ輝虎信州に兵を出して武田  
晴信と相戦ふこゝ村上茂清の爲なり  
近年北條氏康と我を公ももまゝ輝  
虎の私よりくも古管願憲改る爲なり  
實はやむことをはたししかり氏康  
晴信あ人のよの公命よまゝいふや  
收り輝虎幸好なりを起さんや  
此有よまゝく上聞は達し後なる

へしと傳て述らる上使越府は止るこゝ  
二十日とうり種々の餐應らりて上使  
よまゝ引出そのかゝつたりたまふと云

甲新五戦記考正

一 永祿八年正月謙信は越前赤松繁長  
に甲府老曾城主長尾遠江守友宗同  
右衛門尉宗法を徵せしむるに自ら  
こゝろ討つ但しこの衆科は永祿四年

九月十日の川中為合我信玄敗軍を  
倉科より退き中より其後越後縣  
川中為合は居居を根元出せり  
油断のころへ武田太帛我信八百計  
より脇指をも元隠して越後勢旗を  
油断の中へ由元無謙信旗を元合せ  
かねが先子より防ぎ我といふと  
使志とらより多くい馬よとる人

敗軍仕小越後方志田系四帛我時討元  
謙信も上杉重代の重寶五挺槍の中  
第一の槍をもとめて教人実落し  
後より上杉の什物波平行安の長刀を  
自身をもとめていれりといふは海洋の押へ  
なほ繁長新發田長敷色取長實新川  
小條大川二千より無忌防我小内謙信  
旗を返し合せ武田我信を筑摩川



廣瀬まで進討よいりりとの節をた  
河内市繁長精玄六百石より切懸り  
自らは重侍の國後の子刀より敵と海  
切懸り水麻をかうらう防ぎ我信  
と進崩り小謙信は其日の合戦に討死  
大利を得しと後度の軍より若武者の  
我信は仕付られ勿福をうくし廣瀬  
まで進討しと一度の敗軍とを念し

あついにいひ謙信は油取せしむる  
中され小幡をた繁長長尾遠はち  
京に仕付しとあついに若氣より  
小幡は謙信大に怒り穿撃をうし  
遠はち京よりしりし小幡は  
かゝの如くし中付しし小幡軍記

一 永禄八年土州佐保と中を侍此娘  
若年の女つりけるを年頃進く



仕りし常子謙信公寢殿をたるとも  
或時古郷見舞のくちかへを中へ  
帰る謙信公取次女房へ二月廿日前  
後日限を違へて在出入きよう堅く  
中へせよはことのいぬ後郷情を致  
し謙信ウ中へ付を取引はさるるに  
と仰せらる九次の女房取らまひり  
中へせよと帰しけるさう二月廿日は

とよげ娘在出もかしては月上向ま  
違角りてはをさうして九次の女房氣  
をいのけり飛脚をはるる越へて  
出るとは五日経てのら謙信公は中へ付  
らま由不断祈へかの娘をりておされ  
人やりと作けさし由小兒姓荒尾助九席  
と中へその在出る謙信公この女さる子細  
らう今由祈よとして成敗はる女ある也

まゝに遊ばされぬと仰ける荒尾徹ら  
かゝりも遊ばはるるをいひ吾身全る  
まゝに遊ばるるより内なる下より服  
髪を扱小首を討後を総して謙信  
公由家中死罪の者他を十うて千  
二このい但し死罪と及入るの事  
に  
よつて侍されは半以内並に不出さし  
由林の内かゝりて十ふ人元は仰せ

てせよせ流し稀よら自らも遊ば  
されり太田の樂後日敵をうけ  
北條丹後子語ていし貴方の主人  
謙信公由武勇の候はさて並小を解の  
由氣質もて見あふるところ十うて  
八つハ大賢人もあつたの二つハ大悪人も  
らん但し生得怒氣をけりま僻あり  
極く勇ましく清浄うして益量大に

廉直うして隠すところをく明敏うして  
下を察し士を憐愍して育し忠  
諫を好んで容れ流るることとき末の代  
よりつらきときを將の故より八つは  
賢人と訓し中よりとして談笑して

去る 松蔭夜話

- 一 永祿八年細川を討大浦より六月廿  
二日の飛檄が来していよいよ之好叛

遂して將軍義輝公を弑せり  
これに因りて京師大に騒動して兵草  
やまを故より急を以てこれと告ぐ  
輝虎等もまじい涙を流していよいよ我  
先年上洛して得見しなる時密々  
言上せりところを毛かり吾言を用い  
給りしことこの害も過ぐると云て悲歎  
せり而後諸臣を謂ていよいよ今の世

雅う逆后の好と逆討をくげんや頼  
もくは汝等う不存とせんといひり禰  
以て對ふことなり輝虎のいも思ふ  
吾と武田信玄と在のこ志うれも  
友人の皆遠國に在てそ勢及はる  
ことなり只これ京師に逆き者これ  
逆討をく〜といひり謙信一付記

一 永祿八年六月信玄越中へ發向の

右甲府に悉いのその岳ける向者告  
けしに謙信聞届けやくして二万餘  
勢を以て同月下旬は上野國へうら  
出て武田の砦石倉へをく寄せうら  
圍て急々攻たまふ城を攻め幾人  
りとるあつひ多勢殊に法將のひそ  
らつる謙信みつうむひ居るを城  
中ハ小勢といひ其うへ信玄あちより

後誥の類こもるけは守禦の力盡て  
大戸長根城を圍て箕輪の城へ引  
返く謙信勝岡を引け城外所  
巡見して小條丹後もろ堀荒尾基  
席を城代として入るも帰陣  
後へり 越後軍記

一 太田之樂松心よといて大割の乞士  
も解多損害せしめ悲歎のなき

いまも乾くもたう暗沈として諸方の  
ふつふいと止り供佛他土の堂他事  
を一切の事とあまを結ばるる

北條氏康子良氏政二万解務を率  
し上田又次席入道安獨舟を先陣  
として上道中武能よ取誥は戸の城  
を攻落さんとも平井柳清前橋の  
北條相よよ中武能の虚弱を語志



のいふあの方より二百六十つと執て七百の  
とて分てち田方へまゝとせとて一  
見等よ。芳賀久法寺高梨とてお副二  
千五百をとりて城門をもちてせ吾身ハ  
二千五百とてよ。併城を出て下を  
陣取相對し度とのせり合らう。藤信  
と佐渡より帰陣らう。近付武州筋  
へ由馬を出されち田方とたきらん

とて陣解これあるのといふに戸  
より飛脚もつり氏康發向のその  
告らるよとつて早速由發起らう。前橋  
へ着てまゝ伏木の面とて川田出前  
甘糟近には長尾小四郎上村甚忠と  
津田若狭神保志摩柴田出雲中條  
み市右衛門荒尾右馬允是川意仙等  
八千原勝よとて氏康父子もは城落



去延引くをいひしにまゝに謙信出てむろ  
りく城へいゝと夏秋隙ある攻めし  
けきも城をう拒て破るはむと  
とこよ八月十二日輝虎亦橋へもり  
大勢をうやう後浩やさうより先  
達て聞えけきハ氏康いゝあひし  
治ひらん大道寺後河も北條陸奥も  
同兵濃も等九千餘を以て之樂と

押へさせ氏康氏政ハ二万六千を従へ  
小田原へ歸り治りも信濃より高瀬  
を渡り赤橋へ送りも仕掛町口まで  
押込人数をうら入川取んとせしれ  
けるを越後元川田豊前長尾小田原  
以下二千とくうめて引付喰むる二陣ハ  
謙信旗本組柴田出雲中條も所を  
等二千と番ハ甘糟近江黒川竹股等

二千餘人城を出候をまゐる小田原勢川  
かねけるを蒲上儀茶一伎に回をうりま  
返し合せ川田元子突てかへり返返を  
以て礼れしもうる大軍釋まうて一町  
ほど引取る氏康も本陣より氏政を  
まき馬より二千をうりまて引返す  
敵をくつらけ味方をひりうりま  
謙信返して跡へさうりうり氏康の

旗もと見しこまひけよこは席ふとま  
取組雄雄を一時決せんとして二千餘  
を旗をうつむけて掛合自身は槍を  
とち地也下たまふ大將かこのこと  
るれい越後堀甘糟跡儀の外は越後  
なり小田原元も跡へちうりうり大  
かり相残いよとくくとりし  
礼れる大軍のうらちようめけし

返ししるすゆきんは使定まうさうける  
申北條元終は敗軍し十所所返  
討くまうは武造光の元北條新左衛門  
長濃去十所川よま水遠山佐九郎  
以下侍八十餘人難么四百さうり死を  
致も越後元もよ下百六十所討死氏  
康父子との表は橋塚まう川原陣し  
たまうは之樂い二千さうりその時三日橋へ

系し北條を地よ付ては度の由礼を  
申してその次は氏康を橋塚に堪へて  
少くをいして七組元のうち誰まうも作  
付し北條しし之樂由先を仕死を極く  
はし謝をへし言恩のうしこむと申も  
伝るしころよ氏康氏政橋塚を引取  
帰陣のうし相付ゆらまうりてそよ治  
小及りもさうい忍の成田う城へ勢を

さし向ふくしとて平井の柳崎和泉  
ちち田之樂甘糟近江北條丹後同  
伴を以て上公改六千原を永祿八年  
八月下旬赤橋をくもり畠嶽より朝日  
山へ取造相をくもり謙信は朝日  
赤橋をくもり之氏康後造のふもくして  
崎嶽より西二十町を去り由膳嶽に  
陣を居たまふとて勢ふ千原なり

之樂柳崎甘糟等軍旗を旗し然と  
旗を攻む村里を放火し稲梁を刈  
取人殺すお挙げ由膳山まき川より  
小田原へ謙信出朝日山をとるとの  
記述に依り氏政一万六千より出陣ふ  
とくとも軍いふくたは由膳山南二里を  
へくし對陣してまきまきを崎嶽へは  
平井と赤橋とちち田とるもあくま

らまは出ま田をこねま稲を刈あひい  
村里を焼近年のころまもまもま  
小及へのこねを依て氏窮り士困る  
居候かかると老弱の溝壑ま枯く壯  
者四方ま散るまの擧てまもま  
またまもま荒所と成果ま長康  
まま道ま永禄八年九月朝日心  
の擧てまもま家ま侍ことま

分散一自分い小田京と氣の扶持と  
毛信浪人のやうまもま松藤彦信

一 永禄八年九月赤橋より由滞陣の  
路次ま和田八人より浪人挨拶と  
まけて道の例まあう長尾志村の助  
信元と謙信公由同と掛くるまの紙中  
先年河中為合殿の砌内らの放生  
月毛勞仕て死く下りま給ひるま



和国はを捕じう馬よ家せまう教多の  
敵をを候りて凌ぎ始終放れまう  
を候まうけるやも梨山中まうい  
ををゆる例の大き刀まううち捨  
成されまうとよりい只一騎まう由入城  
おりまう父まうりまうのい重科まう由討  
まういあまうまうへくまうもまうや兼代お隔り  
くま由まうまうりまうのい以茶の忠よ思まう

替れ子まうりまうのい由赦免をたされ  
りて下されりまうりまうりまう一度由藤下  
まうりまうり命を擲ち二代の忠よ候へ  
中度浮名まうりまうの條多系七組の元迄  
祈松はまうりまう由元迄これまうりまうり  
まう達子及いりまうりまうりける謙信公由  
候せり志村く助まうりまうりては者らまう  
りまうり七組の元へ作付まうりまうり七組



元つりもとも合點ア  
きよりアよるよ依て謙信公  
と副て小田系へ  
金子と二百両ほ  
り北條氏康へ  
よ悦ひたまひ謙信の  
さうらり器量の侍  
石抱れ技持を  
とといさう  
辞退中より何者の  
付れれ堪忍分  
候しゆん  
同心なる小田系  
年経て小田系元  
といてせり合  
同心従者一人  
元つりもとも合點  
きよりアよるよ依て謙信公  
と副て小田系へ  
金子と二百両ほ  
り北條氏康へ  
よ悦ひたまひ謙信の  
さうらり器量の侍  
石抱れ技持を  
とといさう  
辞退中より何者の  
付れれ堪忍分  
候しゆん  
同心なる小田系  
年経て小田系元  
といてせり合  
同心従者一人

元つりもとも合點  
きよりアよるよ依て謙信公  
と副て小田系へ  
金子と二百両ほ  
り北條氏康へ  
よ悦ひたまひ謙信の  
さうらり器量の侍  
石抱れ技持を  
とといさう  
辞退中より何者の  
付れれ堪忍分  
候しゆん  
同心なる小田系  
年経て小田系元  
といてせり合  
同心従者一人

伎らしく業かくりけをこめ八助わら  
あじ一人まで二人を討ち同所まで二度  
目のせう会するとき馬場氏並其力飛大  
貳より大別のものゝ元会大貳を獲  
付突倒しけしも馬場元池合て首  
渡さをも同一場うてあ度のものからき  
ふらして氏康感状と祈願をそへたま  
らる所れも八助内感状とらと頂戴

いゝ不願をい受もその志いゝり  
て謙信公の内免を蒙り越後へ物ん  
とありまらう謙信公よりくせりたれ  
まゝ志村く助をわら汝よりく七組  
の者もの氣をそらう能きやうく中宿  
八助を越後へ返すも調達仕少へと作  
らる志村く助も内々上度存り居ら  
おゝちんか人まゝ悦ひ七組元のうち

此は城州より出づけるを城州守  
もあつてもやあ志村に助成まゝにルハ彼  
ハ助いっやうなる不存にいつて中もさうり  
くくも夫父の讐をいふはあつてもまも  
存せしむるに匹まもそ志を奪ふへ  
くくもと中もまゝに別人の執り中も志村  
に助成公にいつて中もまゝに法にこそむら  
みてルハハ助一人にいつてもまゝにの缺くる

事と甲州の飛大武を捨て突くも  
珍ゆよあつて其ハ飛ぬ大武さうも  
突て内同よかへつて内前へも中も  
ルハ内邊もやうに虚氣する候とまも  
執りたまふかゝ大まも呵りけれは志村  
に助面目をうゝるに庄敷をまも前へ  
尾出有のまも中もよる謙信公内わゝい  
山城も堅きと云ふ今もつて中も志村助

腹之小が地がよといふハ助は早くさまを  
絶くルハ苗家は得てゐるゆゑにあり  
首付止へ共方中紙くルハと作らして  
手事止じ同上

一 永禄八年沼淵金吉とて尾州浪  
く十年以来内家中よりこの者中尾不  
次の居るに仙可といふ若年の童坊とい  
論を仕う仙可を捕て伏せ察かり

とてて居小を謙信につけ流し内膳を  
放されたる貞宗の服をとりてに  
討ふ二人をきつて一刀に切放し  
流しけるを仙可の親に託しり者側  
らつて是を見合たまは公儀を怒れ  
狼藉の者なりといふも仙可は  
臺の弟として遁れ中へまやうこれ  
仕合文の科なき者なりを同罪とされ

小儀是非及しと怒り服を抜謙信  
公へ切かりきりやまをも端掛し二刀  
切せ給ふ初のち刀門祀社公せて背けり  
よらるるを後のち刀きて右の腕と左の首  
二寸さうり並し切落しれり一丸の子  
み服を所持切公んとさるるや内小兒  
姓上村伊勢松をりあり高服切てお外  
仕るてりり謙信公今四日汝とお討し

たとらつて大いよ笑給ふ日よ

[Faint, illegible text on the left page]

[Faint, illegible text on the right page]



